

6月3日 三位一体の主日

申 4:32～40 ロマ 8:14～17 マタ 28:16～20

1. マタ

wv.19-20 「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」

新約聖書では通常洗礼は「イエス・キリストの名によって」授けられていて(使 2:38 他)、三位一体定式が使徒後教父たちによって用いられ始めたのは紀元 150 年頃からだと言われてします。新約聖書の中では唯一ここでだけ言及されているので、聖書学者はこれを後の時代の加筆であると考えています。しかし、それは私たちにとって感謝すべき加筆であって、そのことによって後の時代の信者は、より適切に使徒たちが伝えた福音を理解することが出来たのでした。

教会にはいろいろな教理があって、私たちはそれをカテキズムを通して学びますが、このようなカトリックの神学は、教会の信仰をいろいろな異端から守るために発達した面が多分にあります。その意味で神学というものは、現代のカトリック信者である私たちが健全な信仰に生きるためにも、とても大切なものなのです。

言うまでもなく、私たちの信仰はイエス・キリストを信じる信仰です。だからこそキリスト教なのです。先ずここで私たちは、自分がキリストではなくて別の何か、例えば主義や主張や特定の文化や政治的目標などを、人生の最大の関心事にしているのではないかと、真面目に考えてみる必要があります。

使徒時代の当初から、教会で信仰が宣言される第一の場は洗礼式でありました。そしてこの信仰宣言は間もなく三位一体定式のものになって行きます。使徒信条も、ニケア・コンスタンチノーブル信条も、父と子と聖霊への信仰を述べる三つの部分で構成されていることを、理解しましょう(カトリック教会のカテキズム 189-191)。

三つの中のどれかが無視されたり、あるいはどれかが極端に重視されてバランスが崩れると、そこには異端的な信仰が生まれて、(聖なる、普遍的、使徒的、唯一の)教会を危険に陥れます。それは昔の話でも、どこか遠い国の話でもなくて、実は私たちのすぐ身近なところにもある切迫した危険であることを、警告しておきたいと思います。日本語で“普遍的”と訳されている語は、原文では“カトリック”であり、これはその起源においては“正統的”“非分派的”という意味で使われていたのです。

2. ロマ

マタ 28:20 の「あなたがた(使徒たち)に命じておいたことをすべて守るように教えなさい」とは、いろいろな徳目や規則を私たちが律法的に学習しなければならないという意味ではありません。むしろ使徒たちが伝えた信仰理解、福音理解のことだと受け取るのが適切です。まさにその典型的な一例が、この wv.14-

17であると言うことができます。

私たち人間は、決して生まれながらに神の子なのではなくて、救い主キリストに選ばれてその贖いを受け、聖霊によって新たに生まれて神の子とされました(エフェ1:4-7 参照)。神は初めから私たちの父であったではありません。洗礼の秘跡によってキリスト・イエスに結ばれて(8:1)、イエス・キリストの父である神が(エフェ1:3)私たちの父となってくださいました。私たちは洗礼を通して「神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは『アツバ、父よ』と呼ぶのです。」(v.15)

ですから、「キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。」(8:9) 三位一体の教理は信者一人一人にとって、縁遠い雲の上の神学ではなくて、身近な救いの現実を宣言しているものなのです。「この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり」(エフェ1:14)、「もし子供であれば・・・神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。」(v.17)

カトリック教会が、復活節を終わって年間に入る最初の主日を、“三位一体の主日”と定めたのは1334年、第196代教皇ヨハネ22世によってでありました。

3. 申

v.40 「今日、わたしが命じる主の掟と戒めを守りなさい。そうすれば、あなたもあなたに続く子孫も幸いを得、あなたの神、主がとこしえに与えられる土地で長く生きる。」

キリスト教は旧約聖書を新約聖書と共に自らの正典(Canon)として受け入れましたが、そのときユダヤ教の律法主義を拒絶しました。教会はこれを私たちがキリストの救いの中に「長く生き」、私たちに御国を確実に受け継がせる「信仰の言葉」(ロマ10:8)、「キリスト・イエスへの信仰を通して(私たちを)救いに導く」(IIテモ3:15)神のことばとして大切にしていたのです。「文字は殺しますが、霊は生かします。」(IIコリ3:6)

旧約聖書の神は、イエス・キリストの父なる神であって、私たちは決してキリスト抜きに漠然と神を信じているわけではありません。「御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断された」(ロマ8:3)神を信じているのです。そして、「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです。」(Iコリ12:3)「唯一の神を礼拝するわたしたちが、三位の栄光をたたえることができますように。」(今朝の集会祈願) アーメン、ハレルヤ。

6月10日 キリストの聖体

出 24:3～8 ヘブ 9:11～15 マコ 14:12～26

1. マコ

v.22 「取りなさい。これはわたしの体である。」

v.24 「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。」

ミサにおける“キリストのからだと血の奉獻”に参加することが許されているのはキリスト者だけであること、そしてすべてのキリスト者は「洗礼の秘跡によって(これに参加する)権利と義務を持っている」(ミサ典礼書の総則 3)ということ、この祭日に特別に覚えようではありませんか。それは決して“たいして重要ではないただの宗教儀礼の一つ”ではなくて、「キリストにおいて世を聖とされる神の働きの頂点」であり、「また人々が、神の子キリストによって父にささげる礼拝の頂点」(総則 1)だからです。

イエスが最後の晩餐でこの“いけにえの記念”を制定されたとき、それは「苦しみを受ける前」(ルカ 22:15)でありました。しかし、教会がミサで記念するのは、キリストの死と復活のいけにえであって、決して“ただの受難前夜の思い出”ではないのです。

私たちが感謝の祭儀の中の記念唱で、「信仰の神秘。」「主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで。」と唱和するとき(1コリ 11:26)、それは、「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです」(ロマ 4:25)と信仰宣言しているのです。

東日本大震災以来、盛んに行われて来たカトリック教会と信者たちによる救援活動、復興支援活動が、教会のこの信仰宣言とどう結びついているのか、ほんの少しだけ立ち止まって考えてみるようにと、今日の祭日は私たちに呼びかけています。言うまでもなく、この結びつきなしには、いかなる奉仕も愛の業も“神奉仕(Gottesdienst)”にはなり得ないからです。

2. ヘブ

ヘブライ人とは、旧約聖書の民イスラエル(ユダヤ人)のことですが、この書が“ヘブライ人からの手紙”ではないことを不思議に思う人がいるかも知れません。“いけにえ”や“祭司職”というのは旧約聖書の律法によって規定された制度であったからです。しかし、イエスはそれとは別の「もろもろの天を通過された偉大な大祭司」(4:14)としておいでになり(v.11)、「御自身の血によって、ただ一度聖所 に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。」(v.12) ですからヘブライ人の旧約聖書は「古びてしまったと宣言され」(8:13)、「キリストは新しい契約の仲介者」(v.15)になられたと、もう一度ヘブライ人に向かって宣言したのが、この“ヘブライ人への手紙”なのです。

そう宣言しているのが“使徒たちと教会”であるということは、すべてのキリスト者にとって“いわば自

明な前提”であるはずなのですが、すでに久しく実際には多くの信者が、自分の信仰をそんなに真面目には考えて来ませんでした。今日の祭日は、そのような私たちのために定められていることを感謝しましょう。

v.12の「ただ一度(εφάπαξ)」とは、“最後の、決定的”という意味であって、神がキリストの十字架において「罪を罪として処断され」(ロマ 8:3)、私たちのために「永遠の贖いを成し遂げられた」(v.12)ということです。私たちは洗礼の秘跡を受けるときに、この贖いの福音を教会と共に、“私も信じますと告白して”(マコ 16:16)救われました(6:4, 10:10、ロマ 6:10、カトリック教会のカテキズム 1123 参照)。カトリック教会が「洗礼は一回限りのもので、くりかえすことはできない」(カテキズム 1272)と説明しているのは、それがキリストの「ただ一度(εφάπαξ)」の贖いに与ることだからなのです(ロマ 6:3-11)。

3. 出

v.8 「モーセは血を取り、民に振りかけて言った。“見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。”」

最初の契約もまた、血が流されずに成立したのではありませんでした(ヘブ 9:18)。しかし、律法に基づく雄牛や雄山羊のいけにえの血は、民を完全な者にすることは出来ません(ヘブ 10:1)。神は第二のもの(キリストの贖い)を立てるために、最初のを廃止されました(ヘブ 10:9)。「ただ一度(εφάπαξ)イエス・キリストの体が献げられることにより、わたしたちは聖なる者とされたのです。」(ヘブ 10:10)

私たちは今日の祭日のミサで、このキリストの十字架のいけにえの秘跡的再現を、感謝して共にささげようではありませんか。「ミサの祭儀は、キリストの行為であり、位階によって秩序づけられている神の民の行為であって、全教会にとっても、地方教会にとっても、また信者一人一人にとっても、キリスト者の生活全体の中心である。」(ミサ典礼書の総則 1) ハレルヤ、アーメン。

6月17日 年間第11主日

エゼ 17:22～24 II コリ 5:6～10 マコ 4:26～34

1. マコ

v.33 「…… 御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。」

十字架につけられたイエスが復活して天に上げられて以来、使徒たちはこの「ひそかに説明された」御国の福音を、公に宣教し始めました。世の初めから代々にわたって隠されていた“秘められた計画”が、今や使徒たちに明らかにされたからです(エフェ 3:9、コロ 1:26)。主イエスの力に満ちた宣教命令が、原始教会の上に響いていました。「わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。」(マタ 10:27) 私たちは今朝、福音書からその使徒たちの宣教を聞いているのです。

「教会、すなわち、秘義としてすでに現存するキリストの国は、神の力によって、世界において可視的に成長する」(教会憲章 3)時代を、私たちは歩んでいるのです。そこでは、「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ 1:16)であり、この神の力は、教会に注がれている聖霊と同様に、いわば“御国の保証”(エフェ 1:14)であって、私たちキリスト者を“終わりの日”(ヨハ 6:40,54)まで確かに守ってくださいます(II ペト 1:11)。

この“現存するキリストの国”には「収穫の時が来る」(v.29)ということ、私たちは今朝の福音朗読で聞かされているのですが、それが残念ながら聖書の朗読からであって説教からではないという現代の教会の実態を、私たち信徒は軽率に非難すべきではないでしょう。復活されたキリストは確かに私たちのミサに来てくださり、「耳のある者は聞きなさい」(4:23)と、聖霊を通して呼びかけておられるのですから。

2. エゼ

南王国末期の紀元前 608 年に王となったヨヤキムは、攻め上って来たバビロンの王に最初の三年間は服したが、その後反逆して 598 年に至って死に、その子ヨヤキンが王位を継ぎました。その三ヶ月後にバビロンの王ネブカドネツアルがエルサレムに攻め上って来て、彼は捕囚としてバビロンに連れて行かれ、バビロンの王はヨヤキンに代えてゼデキヤを、彼に従順な王として位に就かせました。これが第一回捕囚と呼ばれているものです(17:11-14、王下 24:1-17)。

しかし間もなく、ゼデキヤはバビロンの王に背き、エジプトに使者を送って馬と軍勢を得ようとしたのです(17:15)。そして南王国の運命は、まっしぐらに 586 年の滅亡へと突き進んで行ったのでした(17:1-10、王下 24:18～25:21)。

以上の歴史を物語る「たとえ」(17:1,12)に続いて、今朝の朗読テキストで神のことばが語られるのです。17:2-5 に語られたバビロンの王に代わって、今度は主なる神が「高いレバノン杉の梢」(すなわちダビデ王

家)から「その柔らかい若枝」(イザ 11:1 参照)を折って、「高くそびえる山」(イザ 2:2、ミカ 4:1、ゼカ 14:10)の上に移し植える。すると、「それは枝を伸ばし実をつけ、うっそうと茂ったレバノン杉となり、あらゆる鳥がそのもとに宿り、翼のあるものはすべてその枝の陰に住むようになる。」(v.23、マコ 4:32) 私たちは今朝、終わりの日のこと、神の国の実現の日のことを聞かされているのです(Ⅰコリ 15:24)。

v.24 「そのとき、野のすべての木々は、主であるわたしが、高い木を低くし、低い木を高くし、また生き生きとした木を枯らし、枯れた木を茂らせることを知るようになる。」

3. Ⅱコリ

v.7 「目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいるからです。」 v.9 「だから、体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。」

歴史の教会が「神の国の地上における芽生えと開始となっている」(教会憲章 5)としても、「わたしたちはこの地上に永続する都を持っておらず、来るべき都を探し求めている」(ヘブ 13:14)のだということ、キリスト者は決して忘れてはなりません。確かにすべての人が、終わりの日には皆、“高い木を低くし、低い木を高くし、また生き生きとした木を枯らし、枯れた木を茂らせる”キリストの裁きの座の前に立つことになるのです(ロマ 14:10)。

“生者と死者を裁くために来られるキリストの再臨は、あなたにどのような慰めを与えますか”という問いを設定して、ハイデルベルク信仰問答 52 が教えた、あの珠玉の答えをここに紹介しておきましょう。

“それは、かつて私のために神の裁きに対して御自身を献げ、私からすべての呪詛を取り除き給うたあの裁き主が、天から来たり給うのを、私があらゆる苦難と迫害の中にあっても、首を挙げて待ち望むということです。それは、彼が彼と私とのすべての敵を、永遠の刑罰の中に投げ入れ、私をすべての選ばれた者たちと共に、天における喜びと栄光の中へと召し給うためです。”

アーメン、ハレルヤ。

6月24日 洗礼者聖ヨハネの誕生

イザ 49:1～6 使 13:22～26 ルカ 1:57～66,80

1. ルカ

v.80 「幼子は身も心も健やかに育ち、イスラエルの人々の前に現れるまで荒野にいた。」

今年はいへん珍しく、洗礼者聖ヨハネの誕生の祭日が主日と重なって、私たちはこの日固有の聖書朗読に耳を傾けます。

典礼暦には主日に次ぐ典礼日として、祭日、祝日、記念日が定められています。祭日は主要な典礼日のうちに数えられ、その祭儀は前日の“前晩の祈り”から始まることになっています。祝日と記念日は、祭日に較べて重要度が劣ります。

西洋美術のテーマの一つに幼い頃のイエスとヨハネが一緒にいる場面がありますが、素直に聖書を読むとこの二人はヨルダン川での洗礼の場面までは、全く面識がなかったようです(ヨハ 1:31 参照)。今朝の福音朗読に配分されているテキストの部分は、1:5-25 と共に、洗礼者ヨハネ単独の伝承であって、それが福音書が形成されていく過程でイエスの誕生の物語りと結びつけられました。ヨハネをキリストの先駆者として理解することは、原始教会の宣教における基本的な要素であったからです。

父ザカリアへの天使の知らせ(1:10-20)が実現して、ヨハネは誕生しました。不妊の女で既に年をとっていた妻エリサベト(1:7)から恥を取り去り(1:25)、神が大いに慈しまれたことを、近所の人々や親類は喜び合いました(v.58)。父親が天使に告げられたとおり(1:13)「この子の名はヨハネ」と書くと、彼の口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めました(vv.63-64)。「いたい、この子はどんな人になるのだろうか」(v.66)というどここの家にもある子への期待が、救い主の到来と結びついて“主の道を整える、主に先立つ人”(1:76)となって現実になったというのが、原始教会の宣教のいつもイントロ(導入部)であったことを、私たちは聖書から聞くのです。

「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」(2:40)というイエスについての伝承に倣って、「身も心も健やかに育ち」(v.80)と書き伝えられたヨハネの栄誉を、私たちは尊敬と羨望の思いで見上げます。「この子には主の力が及んでいたのである。」(v.66、士 13:24、サム上 2:21,26 参照)

2. 使

v.23 「神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。」

洗礼者ヨハネを語ることは、この決定的なメシアの到来を語ることと決して切り離し得ないという新約聖書の証言は、今日の祭日を祝う私たちキリスト者の喜びの源です。熱心に聖書を読んでも、このヨハネとイエスの結びつきを正しく理解しないなら、「わたしを何者だと思っているのか。わたしは、あなたたち

が期待しているような者ではない』(v.25)という叱責の言葉が、私たちの心を突き刺します。それは神の母聖マリアをはじめ、使徒と殉教者、すべての聖人への崇敬にも等しく当てはまることです。

この意味でザカリアの預言の冒頭にある賛歌(ルカ 1:68-70)は、まさに「この救いの言葉」(v.26)であって、それはアブラハムの子孫の方々(= ユダヤ人)、ならびに彼らと共にいる神を畏れる人たち(v.26、ルカ 1:50 参照)に送られました。現代の私たちは、イエスも肉によればユダヤ人(ロマ 1:3, 9:5 参照)、ヨハネも八日目に割礼を受けたユダヤ人(ルカ 1:59)、使徒パウロも(フィリ 3:5)その他の使徒たちも皆ユダヤ人であったということを、福音(秘められた計画)理解の大前提として重く受け止めなければなりません(エフェ 3:6)。

3. イザ

これは“僕の歌”の二番目のものですが、第三(50:4-9)、第四(52:13~53:12)と共に、イスラエルは主の僕となって自らの民に、さらに地の果てまでも、神の救いをもたらす者となる(v.6)と預言されています。この古きイスラエルに代わって「救いを地の果てまで、もたらす者」となってくださった方、それが「肉となって、わたしたちの間に宿られた」キリスト(ヨハ 1:14)でありました。

教会がこのキリストの栄光を見て信じ、救いを受けるために、今も洗礼者ヨハネはイエスを指さして、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(ヨハ 1:29,36)と語っています。もし教会がこのヨハネの証言を確かに聞いているのなら、私たち現代のキリスト者はそれに答えて喜びのうちに宣言しようではありませんか。「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた」(ヨハ 1:16)と。今日は洗礼者聖ヨハネの誕生の祭日です。 ハレルヤ、アーメン。